

④超越性から内在性へ。まず、言説の歴史的分析を、あらゆる歴史的決定から洩れる起源の探索と反復たらしめ、また、それを解
積たらしめ、すでに言われたこと（これは同時に、言われざることでもある）について耳を傾ける。こうした、言説の無限の連
続性と、絶えず更新される不在の働きの内でのそのひそやかな自己への現前とを保証する機能をもつ、これらすべての主題を退
けること。

→出来事の闖入のなかで、言説の各瞬間に応じうる態勢にあることが必要である。

フーコーの実践は、所与の精神病理学や経済学等がいかなる統一体（＝多様体）を形作るのか、いかなる法則によって自己を形作
り、いかなる現説＝出来事の基礎の上に明確な輪郭をしめすのか、という問いかけである。連続性の観念から開放されるや、言表
の広大な領野が開かれる。言説空間一般における出来事の集まり、〈言説＝出来事の純粋な記述〉の企てが多様体の探求のための地
平として現れる。言説＝出来事の領野は、常に有限であり、現実的にただ定式化された言語的継起によってのみ制限されている総
体である。

→いかにして、言表は発生するのか？

→思考の分析は、その用いる言説とくらべると、常にアレゴリカルである。出来事の稀少性と特異性のうちに、言表を捉えること。
その存在条件を決定し、限界を最も正当に定め、それに結びつきうる他の諸言表との相関関係を打ちたて、それが他のいかなる
言表形態を排除するかを示すこと。

→一体、述べられていることのうちに現れてきて、いかなる場所にも現れない、この独自の存在は何か？**此性**。

→言表は常に、言語によっても意味によっても完全には汲みつくされえない出来事である。

→明るみにすべきは、言表＝事実の解釈ではなくて、それらの共存・継起・交互作用・相互決定、独立した、あるいは相関的な変
換、などの分析である。

2. 言説の形成と編成

言表の大きな族「医学というもの」「経済学というもの」「文法というもの」は、空隙のある、錯綜したさまざまな系があり、差異・
偏差・代替・変換などの上にその統一性を築く。

①一個の言説の統一性がつくられていないかどうかを　—一個の対象の永続性や独自性によるよりも、さまざまに異なった対象が
横顔をみせ、たえず変形する空間によって— 知ることが、問題として提出される

②分散した異質的な諸言表の共存を明らかにすること。それら言表の配分を支配するシステム、それらが相互に持つ支え、それら
が互いに含み合い、排除しあう仕方、それらがうける変換、それらの交代・排列・代替の働きである。

→医学が記述的言表のひとつの系として組織化された事例

③言説の統一性を、諸概念の首尾一貫性ではなく、出現・偏差・分離・分散・両立不可能性において見出すこと。

→文法の例

④言表の総体を個体化するために言表が途を開いているのは、既存のさまざまな主題に生氣をあて、相対立する戦術を生じさせ、
相容れない諸利益とかわり、確定された諸概念の働きによって、相異なった諸部分を働かせる、という相異なった可能性である。

分散そのもの（離散的集合）を記述するという考え方。**〈形成＝編成の規則〉**は、与えられた一言説の或る配分における、存在の
（共存・保存・変容・消滅）諸条件である。このような領野の探求が必要となる。
作品を解体すること、影響や伝統を無視すること、起源の問題を決定的に捨て去ること、作者の傲然たる現前を消え去るままにし
ておくこと、・・・。

3. 対象の形成と編成

「形成＝編成の規則」というほとんど素描もされていないこの観念に、内容を与えるかどうか、を知ること。

19世紀以来の精神病理学的言説を例に。

a) 現出の諸平面；個別的な差異（病気・狂気・異常・痴呆・神経症・精神病・・・）がどこに現れ、どこで指示され、分析され
うるのか、を示すこと。この表面は社会や時代によって異なる。19世紀の精神病理学は、家族・身近な社会集団・労働環境・宗
教的共同体によって構成されている。

→差異化の諸領域において、隔たり・非連続性・閾のうちにあって、精神病的言説は、その分野を限定し、語られることを規定
し、それに対象の規約を与える可能性を見出す。

b) 境界画定の諸審級；医学は19世紀、社会野で狂気を対象にし、裁決し、指示し、命名し、打ち立てるものとなったが、裁判
所・宗教的権威・文芸批評の諸制度とも隣接している

c) 特殊性規定の格子；精神病的言説の対象としての相異なった「狂気」を相互にわけ、対立させ、類縁づけ、再び結合させ、
分類し、派生させることを可能にする諸システムを問題とする。

精神病的言説は、19世紀に、特権的な諸対象によってではなくて、それ自らが自己の対象　—とどのつまり、きわめて散らばっ
た諸対象— を形成＝編成する仕方によって、特色付けられる。この形成＝編成は、現出・境界画定・特殊性規定、などの諸審級
のあいだに打ち立てられた連関の総体によって確かなものにされる。

→「裁判上の尋問・警察の証拠調査」と「医学上の質問表」とのあいだの関係、「医療環境のうちでの治療上の制約」と「牢獄の中

での刑罰的制約」との関係。これらの関係こそ、精神病的言説に属する仕事において、相異なる諸対象の一総体すべての形成
＝編成を可能にしている。

①言説の対象が現れるための諸条件。対象は、関係の複雑な束からできた実定的な諸条件のもとに、存在する。

②言説の連関は、諸制度・経済的・社会的諸課程・行動の諸形態・規範のシステム、などのあいだに打ち立てられる。これらの連
関は、対象の内的機構を明確化することはないが、対象の出現、他の対象との並置、差異性、還元不可能性を明確にする。

③言説それ自身のうちに定式化されたかたちで見出されうる第二の關係（ブルジョワ家庭と裁判上のカテゴリーの「あいだ」）を識
別すること。〈第一の、現実的な諸連関〉〈第二の反省的諸連関〉、そして固有に「言説的」と呼びうる〈諸連関〉のシステム。

④言説の対象を扱い、命名し、分析し、分類し、説明するために、言説が実現すべき関係の束を決定する。これらの連関が特徴付
けるのは、実践としての言説それ自身である。

→言説の内でのみ素描される諸対象の規則的な形成＝編成を持つてすること。これらの「対象」を、「物の基礎」との照合なしに、
しかし、それらを、言説の対象として形成＝編成することを可能にし、かくしてそれらの歴史的出現の条件を構成する諸規則の
総体に帰着させることで明確化すること。

→言説のなすことは、物を指示するための記号の使用を超えており、この「超えて」こそ、言説を言語体系やパロールに還元不可
能なものにしている。この「超えて」こそ、明らかにし、記述しなければならない。

註

「言説の秩序　L'ordre du discours」の略号は[OD]とする。

質問

・ポパー「科学において、ある命題に対して反証可能性が要請されねばならない」ならば、その命題（反証可能性）それ自体は反
証可能であろうか。反証は権利として要請できても、事実としては保留されるのではなからうか。ポパーの科学の定義は、科学
特有の進歩史観がもたらす弁証法ではないだろうか。

・ドゥルーズの多様体のシステムである、「存在の一義性」とフーコーの言表理論を比較すること。

→「存在の一義性」とは、「差異化＝微分化」と「異化＝分化」、記号と物質の二つのセリー、表現と内容の二つのアレンジメント
が「亀裂」あるいは〈差異〉（＝抽象機械）によって接続し、共鳴することによって、個体ないし多様体を構成するというシステ
ムである。「個体化— 差異化＝微分化／異化＝分化」の式。ハイデッガー的に言い換えれば、「存在—存在論的差異—存在者」
に当たる。ここでの〈差異〉とは「対象＝X」に他ならない。

→「リゾーム」とは「n－1」「連結と非等質性」「非意味的切斷」「地図作製法」「複写術」を原理とする多様体である。

→フーコーの「言説」はスパティウム（〈理念〉あるいは強度的空間）に近く、「言表」は強度＝内包量に近い（と考えられるでし
ょうか？）そうであるならば、フーコーの試みは言語と意味ではなく、強度空間によって横断的な言表の機能（強度＝内包量）
を炙り出すことにあり、さらにそれらを多様体＝個体として磨きだすことにある。命題の意味ではなく、言表の機能を分析する
こと、例えば「性」が生物学的に問題とされるか、政治学的に問題とされるかで異なる。「性＝X」「狂気＝X」という超越論的
対象、〈差異〉があり、「言説」という潜在的な場が形成され、この場の勾配に基づいて棲息する諸々の「言表」の群れがある。
→対象＝Xは「固有名」あるいは「コーラ」に近い振る舞いをする（デリダ、「コーラ」は感性と悟性のあいだの中動態であり、母
であり乳母である・・・）

→「言説＝ベクトル場」と「言表＝スカラー量」

・ベンヤミン「パサーージュ論」、ヴァールブルク「ムネモシュネ」、ゴダール「映画史」